

# 緘黙の不登校生徒とのプレイセラピー

—— キャッチボールを行いつつ ——

大石 英史

A Process of Play Therapy with a Student of  
School Refusal Displaying Elective Mutism

Eiji OHISHI

## 1. 問題と目的

本稿では、軽度ではあるが場面緘黙の症状を持ち、高校入学後より不登校になった、ある少年とのプレイセラピーについて紹介する。一般に、思春期に入ると大人に対する反発や自尊感情の発達により、本人が自分から心理的援助を求めてくることは少なくなり、また、実際に心理面接をはじめても話題が続かないことが多い。この少年は、児童期より、学校に行くと言葉が出なくなるという場面緘黙の症状があり、中学生までは無口な性格の生徒として何とかやってきたが、高校入学時の自己紹介の3分間スピーチで言葉が全く出なかったこと、そして、野球部に入ったが掛け声が出せず、これまでにないハードトレーニングを受けたことをきっかけに不登校になり、その後、高校教師の紹介で、母親と二人で大学の心理教育相談室を訪れた。言語を媒介とするかわりにはじめから期待できなかったが、本人が野球が好きであるという情報をあらかじめ得ていたので、来談当初から、本人を面接室には誘わず、校庭に出てキャッチボールをはじめた。結局、1年間計40回にわたってかかわったが、セラピストである筆者の方は、言葉によるやりとりがほとんど成立しないことからくるマンネリ感、あるいはクライアントに変化が見られないことに対する焦りと無力感に襲われることもしばしばであった。

しかし、このようなマンネリズム、焦り、無力感等の諸感情は、場面緘黙という症状を持つクライアントとかかわる際に、セラピストの側の引き起こされてくるかなり一般的な感情であると同時に、青年期という発達段階にあるクライアントとかかわっていると、とかく援助の方向性を見失いやすく、そのような場合にかなり普遍的にセラピストに感じられてくる、ある種のやりにくさのようにも思われる。

本稿の目的は、不登校の緘黙少年とのキャッチボールによるプレイセラピーを、クライアント本人とのかかわりを中心に見直し、その一連のプロセスの意味について考察することである。それを通して、場面緘黙や不登校という症状や現象を越えて、思春期・青年期のクライアントと、一見成果がなかなか目に見えない中でかかわり続けていくことの援助的意味、また、セラピストの側に必要とされる態度の柔軟性あるいは技法上の工夫について検討してみたい。

## 2. 事例の概要

インタビュー面接時に母親によって語られた本人の生育歴および家族に関する情報は、次の通りであった。

### (1) クライエントの生育歴

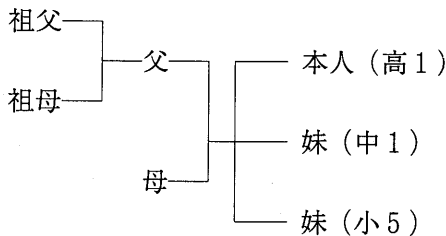
幼児期…登園拒否の時期があった（母親との分離不安が強かった）。

小3……転校そして祖父母との同居がはじまり、胃潰瘍にて1か月入院。小学校時代の成績は中程度、交友関係は少なくおとなしい子であった。

中2……1学期、バスケットボール部のハードトレーニングで胃痛、時折登校しぶりが見られる。一人親友がいる。時々祖父と激しい喧嘩になり、やけを起こすと、頭を壁にぶつけるなどの自傷行為が見られる。プロ野球が大好きで、巨人軍の中畑と西本のファンである。

高1……市内の公立工業高校へ入学。3分間スピーチと野球部のハードトレーニングをきっかけに、ゴールデンウィーク後より不登校となる。これまで、反抗期と呼ばれる時期はなく、ストレスが内向し胃にくるタイプである。趣味は野球とテレビ、教科では英語が嫌いだという。

### (2) 家族構成



父……土木業、仕事多忙。性格はおとなしく、無口。本人に対しては放任（どう接すればいいのかわからない）、母親まかせ。話しかけても本人が口を開かず苛立つこともあった。

母……事務パート。性格は神経質で、本人に対しては甘やかし（手を掛け過ぎた、何でも先回りし、してやっていた）。本人の不登校に対しては焦りの気持ちが強く、高校ぐらいいは出てほしい。義祖父母との葛藤、夫とも気持ちが通じていない（夫に相談しても返事が返ってこなかったり、男性として頼りない）。仕事をしているときが一番ホッとする。

妹たち……本人とは比較的仲がよい。

祖父……家庭内では一番権威を持っている。性格は頑固で、何かあるとすぐ口を出してくる。最近、ボケが始まってきた。

祖母……本人に対して要求が強い。

祖父の代は、農家をしており、現在は兼業。本人は今でも農作業など家の手伝いをよくする。家庭では母親と妹以外とはほとんど話さない。ただし、学校の話になると母親にも心を閉ざす。これまでに反抗期らしい反抗期はなく、自分の意思表示をすることが非常に苦手であり、母親によると、何かを尋ねたときに返事がないときは、「嫌」という意味

だということであった。

### 3. プレイセラピーの経過

#### (1) プレイセラピーにおける時間の構造化

高校の生徒指導担当教諭から、大学の心理教育相談室を紹介され、母親と本人の二人が来談してくる。母親の面接は、中年の女性セラピストが、本人は筆者が担当する。なお、母親面接については、教育的ガイダンスを中心とした心理的サポートが、最初の3ヶ月にわたり計8回行われた。それ以後は、本人が一人でバスに乗って相談室に通う。

本人については、言葉による面接は成立しなかったが、野球が好きであることを母親のインタビュー面接で聞いていたので、初回より二人でキャッチボールを行うことにした。(以下、クライアントである本人を“CI”、セラピストとしてかかわった筆者を“Th”と記す。) 来談初回は、相談室のある建物の中庭でキャッチボールを行ったが、少し狭かったので、2回目からはグラウンドに出ることにする。

言葉のないキャッチボールは単調で、1時間の時間をもてあましがちであった。したがって、回を追うごとに少しずつプレイセラピーの内容を工夫し、時間を構造化していった。その結果、数回のセラピーによって、ようやく時間の過ごし方に次のような落ち着いた形が出来上がっていった。まず、グラウンドに出てジョギング2周(1周約400メートル)→準備運動(一緒に柔軟体操を行う)→二人とも立ってキャッチボール→CIがピッチャー、Thがキャッチャーとなつてのキャッチボール→休憩(このときタイミングを見てThから少し話しかけてみる)→バッティング(一方がボールを投げ、もう一方が打つ場合と、一方が自分で打ったボールをもう一方が取る場合の2通りを随時ローテーション)。これらを全部やり終えると時間が来るので、軽く整理運動をして終了する。なお、雨の日はグラウンドが使えないため、プレイルームで卓球をして、時間を過ごした。

#### (2) CIの変化過程

回を重ねるにつれ、来談してくるCIの表情が次第に緩んでいった。4回目のプレイセラピー(以下、#4のように記す)では、CIが力の加減を間違えてボールがThの頭上を越えてしまったとき、「アーツ」と叫ぶ。ThはこのときはじめてCIの生の声を聞く。#6では、ピッチングの時に一球ごとにモーションを掛けて投げてるようになる。#10では、Thが打った球がグラウンドの屏を越え、たまたまそこを通りかかったトラックの荷台に乗っていくというハプニングが起こった。このときCIは、屏の方を指差しながら、「屏……トラック……乗った……」と単語を並べるように訥々とその状況について語ってくれた。また、#8において、ジョギング後の柔軟体操の時にCIの身体にはじめて触れてみたが、まるで板を乗せているように緊張し堅かった。しかし、その後、さりげない形での柔軟体操(スキンシップ)を繰返していくうちに、#17には、Thの「すこし緩めてごらん」という声掛けで、自分の身体の緊張を緩めることができるようになる。このように、心身の緊張がほぐれていくのに伴い、CIはプレイセラピーの場で少しずつ自分の力を発揮するようになった。例えば、Thが強い球を投げると#16には、CIも強い球を投げ返すようになったし、その頃よりジョギングのラストスパートではThを振り切ってゴールするようになる。

言葉のよるコミュニケーションについては、プレイセラピーの合間にThから話しかけても、瞬間表情が堅くなり、言葉が返ってくることはなかったが、野球のことについての質問にはうなずきの形で答えてくれる。#17において、Clがピッチングしているとき、その球が見事にカーブしたのをThがキャッチし、そのことを伝えると、とてもうれしそうであり、それをきっかけに、Thがカーブの投げ方を教えて欲しいという、身振り手振りで教えてくれる。その後、#19からは、相談室ではなく、自分が大事にしているグローブを家から持ってきて使うようになった。また、この頃より、プロ野球（巨人の選手のことや、日本シリーズのことなど）の話になると、時折声の混じった表現が出てくるようになった。ただし、学校についての話題になるとあからさまに拒絶的になった。

高1も終わりに近づいたとき、高2への進級をめぐって、学校と親の双方より復学へのかなり強い働きかけがあり、Thも何度かClの意向を確かめようとしたが反応は堅く、Thは最終的に、Clに向かって独り言のように「学校はあんたが行きたければ行けばいいんよ。そうじゃなかったら、親が何と言っても行かなければいい」と話した。そのとき、Thの言葉をじっと聞いていたClの表情は、真剣そのものであった。結局、Clの無言の意思表示により、休学の手続きは取ったものの復学はせず、母親が探してきたアルバイト（壁の塗装の仕事）をするという生き方を本人自らが選択し、面接は終結に至った。

以下、表1.は、プレイセラピー全体の経過である。

表1. プレイセラピーの経過

月	回数	プレイセラピーの内容 (Thの工夫)	Clの言動およびその変化	その他の出来事
5	1	機械的で単調なキャッチボール		
	2	ジョギングをはじめ Clにピッチングさせる	やや強い球を投げってくる	
	3	準備体操をし、休憩をとる Th、力一杯投げる	はじめての笑顔	
	4	バッティングをはじめ	「アーツ」という声 表情がやわらかくなる	
	5	プロ野球のことについて話しかける		はじめての雨 (プレイルームで卓球)
7	6		一球ごとにモーションをかけて投げってくる	
	7	バットの持ち方やボールの投げ方について尋ねる		
	8	準備運動 (はじめての身体接触)		
8	9			
	10		単語を並べるように状況を語る	うれしいハプニング
	11	卓球、ピンポン球の打ち合い (お互い熱中する)	はじめてひとりで来る (台風で大雨の日)	
9	12			このままでいいのか、Thの焦り強まる
	13		はじめて25分遅刻	
	14			
	15	壁にボールをぶつけて別々に遊ぶ 座って話をする (Thから質問する)		

	16		ランニングでThを振り切ってゴールする こちらが強い球を投げれば強い球を投げ帰す	
10	17		Thの指示により身体の緊張を抜くことができる 「ハーブボール」という言葉が出る	
	18		プロ野球の話になると表情が生き返る	
	19	ジョギング(2周)→準備体操→キャッチボール(立って→座って、休憩含む)→バッティングの定番化	自宅より自分のグローブを持ってくる	
	20		母親より電話があり休み(日本シリーズのため?)	
	21		来ていたにもかかわらず、時間を間違え、Thと会えないまま帰る	
11	22	Thが途方に暮れ座り込むと、ひとりでボールで遊んでいる		Thのマンネリ感、再び強まる
	23		はじめて相談室のドアをノックする球にスピードが乗ってくる	
	24	休憩時に、さしさわりのないことをいくつか質問するが、学校やアルバイトなどの話題になると堅くなる		
	25			
	26	一緒に400mのタイムを計りはじめる		
27	27		400m走のラストスパートではThを追い越していく	
	28	雨のため卓球、その後面接室へ	面接時<この時間に何が一番やりたい?>と尋ねると、「野球のトレーニングがしたい」という返事	
	29	Clの400mのタイムを計る Thはコーチ役	「ラスト!」と声を掛けると懸命に頑張る	
1				1/14、Th、スーパービジョンを受ける
	30	面接室でThの気持ち(もう少し話をしてほしい)を打ち明ける	何を聞いても無言のまま	
	31		胃の調子が悪いということで休む(身体化?)	
	32	400mを一緒に走り、3回目はひとりで走らせる その後キャッチボール		
2	33	途中雨が降り出し、待合室で「来週何がやりたいか」を尋ね、次回は卓球に決まる		
	34	卓球4対3でThが勝つ		
	35		球が自分を越えて飛んでいくと「ワー」っと大声を出す	
	36	雨のため卓球(Thの勝ち)	ピン球を踏んで割る	
3	37	母親からの要請もあり、次年度学校をどうするかについて尋ねるが、答えようとしないので選択肢を5つ	「ちょっとは行ってもいい」を選択	

	(絶対行きたくない・あまり行きたくない・ちょっとは行ってもいい・他にやりたいことがある・わからない) 提示する		
38	キャッチボールの後、Th、復学について尋ねるが、返事なし		
39	学校のことには触れずにキャッチボール(ノッキングが中心)		
4	40 Th、Clの学校に行きたくない気持ちをサポートし、自分が納得の行く選択をするのが一番大事という旨の助言。それを母親にも伝えてくれるよう頼み、終結となる	学校のことで父親と口論し、#40予定の面接には来談せず Thの話しかけに対する反応がいつになくスムーズ、にもかかわらず表情はこれまでに硬かった	3/12、母親と面接(休学の手続きが近づいている 母親としては、復学、どうしても無理ならアルバイトをしながら職業訓練校に行くことが希望)
<p>* #40の後、学校に対しては一応休学の手続きを取り、4月半ばより、母親の紹介で塗装のアルバイトをはじめる。</p> <p>* 5月末、母親より電話。Clがバイクを買った件で学校より電話があり、休学中は相談室に通うように言われたが、どうすればよいか。アルバイトは続けている。雇い主が暖かく声を掛けてくれ、順調にやっているとのこと。Th、今はそのアルバイトに専念した方がよいだろう。また何があったときに来てくれるよう伝える。母親は、「ありがとうございます」と電話の向こうで涙ぐんでいる。</p>			

#### 4. 考察

##### (1) キャッチボールによるコミュニケーション

青年心理学では、高校1年は青年期中期にあたり、この時期は、エリクソン(1959)が指摘するようにアイデンティティの確立という人生における重要な発達課題を達成しなければならないという意味で、心の動揺の激しい時期である。精神内界では、自尊感情の高まりが見られる反面、ちょっとしたことで劣等感に苛まれたりしがちである。また、高校は義務教育からはじめて解放される時期でもあり、生徒たちはそれぞれの形で自分の自由なあり方を模索し表現するようになる。ところが、本Clの場合、入学当初からそのような活発な雰囲気や溶け込めなかった状況に加え、3分間スピーチでの失敗や先輩後輩のタテ関係に基づく部活動でのハードトレーニングでの挫折体験が追い打ちをかける形となり、不登校を余儀なくされた。

発達段階的には言葉による面接が可能な時期に達してはいたが、軽度の緘黙という症状を持った本Clの場合、言葉によるセラピーははじめから成立し得なかった。ただし、インテーク面接で母親から、Clが野球には強い関心を持っているという情報を得ていたので、これをかわりの唯一のチャンネルとして活用し、キャッチボールによるプレイセラピーを行うことになった。

しかし、実際にはじめてみると、キャッチボール自体が、言葉によるコミュニケーションと非常に類似していることが実感された。例えば、キャッチボールが続くようにお互いが配慮しあうこと、相手が投げたボールをこちらがどう受け止めどう投げ返すか、そしてこちらが投げたボールを相手がどう受け止めどう投げ返すかという相互応答性、さらにその応答の中に自分の攻撃性を込めたり込めなかったりすることなど、通常言葉によるコミュニケーションにおいて生起している対人体験の主要な要素が、そのままキャッチボールの中にも存在していた。さらに言えば、キャッチボールには、おのおのの攻撃性の表出を言葉によるやりとりよりも自然な形で、お互いにとって安全な形で行えるという利点がある。また、言葉ほどの明確な意味の伝達はできないが、ボールの速さ、強さ、重さ、回転の仕方、モーションのかけ方などによって、情緒の量と質を原始的な形で伝え合うことができたのではないと思われる。このように、キャッチボールという方法は、緘黙児に限らず、一般に情緒障害児が治癒していく際に重要とされる情緒的な交流や攻撃性の表出という課題を比較的無理なく遂行できるというメリットがある。CIが示したプレイセラピーでの変化は、キャッチボールによるコミュニケーションによって内面の表出が豊かになっていくプロセスをよく示している。これは、本CIにとって、緘黙という症状が克服されていく体験というよりも、言葉によるやりとりが可能になる前提的条件である情緒的交流の基盤が形成されていくために必要な時間だったのではないだろうか。

## (2) セラピストのかかわりのスタンス

本事例におけるThの存在は、CIにとって、学校の先生でもなく、かといって友達でもない「斜めの関係」にある。また、CIにとってプレイセラピーの場は、学校でもなく、普通の遊び場とも違う「中間の場所」として存在している。これらの中間性を帯びた体験が、CIにとっては自分の内的な葛藤の世界と外の世界とを橋渡しする役割を担っていたことが考えられる。その意味で、相談室という場所とそこに通った1年間は、CIにとって、学校に行っていない自分を、周囲のそして自分自身のマイナスの眼差しから守ってくれる場所であったとともに、外の世界とつながっていく社会化のための準備期間になり得たのではなかろうか。

Thの学校に関する考え方については、かかわりの当初から、CIが学校に復帰するかしらないかはどちらでもよい、それよりもCIが自分で納得のいく将来の選択ができることが大事であると考えていた。母親をはじめ周囲の期待は復学してくれることであつたので、Thは図らずも周囲の期待（登校刺激）からCIの自由意思を守る役割を果たすことになった。すなわち、Thが学校の教師とは異なり、学校に復帰させなければならないという役割意識から自由なあり方でCIとともに居ることができたこと、これが、CIに余分なプレッシャーを与えず、自分探しを保障するうえでプラスに働いたのではないと思われる。

次に、CIの家族が抱えている問題として、母親の嫁姑（特に祖父）との関係、そしてその関係のしこりを背後で支えている夫婦関係のあり方が、CIの症状を形成している可能性が考えられた。特に、CIは転校して祖父との同居がはじまった時期に、小学校3年という若さで胃潰瘍を患っている。このときから、家庭の中に母親の居場所がなくなっていったこと（パートの仕事に出ているときが一番ホッとするという母親の発言）、その母親の葛藤を引き受ける形で本CIの症状が形成され、また、その背景には、社会化を促す安定した母子関係が形成されていなかったことが考えられよう。なお、これらに関しては、

母親面接の担当者による8回の心理教育的カウンセリングがすでに行われていた。Th個人としては、CIの家族に以上のような問題点が示唆されていたが、以下の理由により、家族関係に介入することは差し控えることにした。

すなわち、すでに高校生という発達段階に達した本CIをサポートするには、母子関係のやり直しよりもむしろ親から上手に距離を取り、自分の将来を積極的に考えていくことをサポートすることで、親からの自立を促すやり方が適切であると考えられた。その判断の背景として、本CIは、緘黙という症状を抱えてはいるが、人格障害のように不安定で人を試してくるような人格的な歪みは感じられないこと、多少の強迫性は感じられるものの、ほとんど毎回決められた時間に来談することができること、場面緘黙という症状自体も、それほど重篤なものではなく、将来、「大人の無口」という性格に移行していける可能性を感じられること。そして、嫁姑の関係や夫婦関係は、CIにとってそれがよいものであれ成長の妨げになるものであれ、そのような形で長年にわたって微妙なバランスを保ってきたものであるゆえに、そう容易に変化は期待できないし、また、一概に変化を起せばよいというものでもないこと。このような見地から、CIの精神的に健康な部分に着目することで、CIにとって自分探しがやりやすい人間関係の土壌をThとの間に作り、時にはCIの味方になって親の干渉から守ってやりながら、自己の立て直しの作業を見守っていくことを重要視した。

### (3) セラピストがプレイセラピーの単調さに耐えることの意味

言葉によるやりとりを介さず、ただ黙々とキャッチボールをするという、きわめて限られたチャンネルでの単調なかかわりを続けていく中で、Thの側には、こんなことを続けていていいのだろうかという焦りや話ができるようになってほしいという期待に応えてくれないことへの苛立ち、そしてその結果、援助者としてCIに何もしてやれていないことの無力感などの一連の感情が繰り返し体験されていた。今から振り返ってみると、これらは、話せるようになることを治療目標に置き、援助者として何か意味のあることをやりとげたいと考えることからくる、Thの焦りであった。しかし、Thが体験した焦りや苛立ちは、CIの周囲の人たちが体験していた感情と同質であったと思われる。特に、CIに対してできるだけ暖かくかかわろうとしながら、はっきりした成果が目に見えないことで焦りや無力感を感じていたであろう母親と類似の感情体験をしていたのではないか。このように、Thに無力感を感じさせながらも依然として黙ったままで来談し続けるというCIの行動には、どのような意味が込められていたのだろうか。

語らないことは、それ自体CIの「表現」であり、そこには意識では話したいけど話せないという葛藤がありながらも、その背後にはCIの無意識の主体性が存在しているように思われる。より端的に言えば、そこには、CI自身の攻撃性が見て取れる。緘黙という症状に持続的に直面することでThの側に生じてくる攻撃性がCIに投射されている部分(河井ら、1994)を差し引いてもなおである。CIは緘黙という症状を持つことによって、自分の中の攻撃性を防衛している。正確に言えば、攻撃性が表出されると周囲にいる家族たちをとことん傷つけてしまうし、それによって自分も傷ついてしまうであろうような内面のわだかまりを、緘黙になることで抑え、その衝動から周囲の者と自分自身の双方を守っていたのではなかろうか。このように考えると、CIの攻撃衝動にどう対処し、CIが症状を持たなくてもよいような心のバランスをどのように回復していくかという問いは、Th



がCIとかかわっていて自分自身の中に引き起こされてくる諸感情にどう向き合っていくかという問いとして、そのまま置き換えられるということである。Thは、単調なキャッチボールの繰り返しによる退屈さや焦りなどの感情にどう対処したのか。あるいは、援助者としての主体性をどう維持したのか。実は、このことが本プレイセラピーにおいて最も丁寧に内省され考察されなければならない部分である。これは、神田橋（1990）が、「逆転移の活用」として提唱している治療的工夫のひとつでもある。

#### (4) セラピストとしての主体性

まず、Thに体験される退屈さやイラ立ちや無力感をかろうじて支えてくれたものは、CIに接する際のこちら側の意識のあり方である。それは、先に述べたように、Thが体験していた感情はThだけが特別に感じているものではなく、母親をはじめCIの周囲の人たちが体験していた感情と同質であろうということ。そして、それこそがCIにとっての「表現」であるということ。それは、終始沈黙という形でなされた自己主張であり、プレイセラピーの場面でいえば、ボールの投げ返しがCIにとっての言葉であったということ。したがって、Thが自分の中に立ち起こってくる感情を自分自身で「抱えること(Winnicott, D.W., 1971)」が、CIの攻撃衝動への対処能力をThの内側に育み、それが対人的相互作用によってCIに伝わり、緘黙という症状を必要としない新しいあり方を可能にしていくということである。このような認識によって、援助者はある程度心のゆとりを確保できるのではなかろうか。ただし、これらはThの意識のレベルで行われた、いわば「受け身の主体性」の回復および獲得に留まるものである。

Thとしての主体性をより積極的に確保するための第二の工夫としては、Thの側に立ち起こってくる攻撃性を、キャッチボールの中で表出することが可能であったということである。例えば、ThがCIに強い球を投げたり、取りにくい球を投げるといった形で表出できるし、CIも投げ返すという形で、それに応えることができる。すなわち、キャッチボールという守られた形で自然にお互いの攻撃性を出し合える。また、Thが自然に主導的に振る舞える場面として、ジョギングの後の体操のときに、コチコチに緊張したCIの身体に触れ、弛緩の練習をさせることもできた。このような場面は、Thがマンネリ化しがちなCIとの関係から距離を取り、自分自身のThとしての能動性を回復していく工夫として重要であった。

第三に、Thには、決して画期的なものではないが、第3章の(2)で確認されたようなCIの前向きな少しずつの変化を肯定的なものとして大事に扱えるまなざしが要る。そして、CIが現時点において持ち合わせているコミュニケーションのチャンネルを見つけ出し、それを大いに活用していく姿勢も必要である。例えば、Thがボールの投げ方やプロ野球の情報などをいろいろCIに教えてもらうことなどは、その好例であったろう。これらのことは、いつまでたっても話さないCIとの関係そのものをそれなりに楽しめることにつながるだろう。

#### (5) クライエントの「持ち味」を生かすという視点

本CIは、2つの追い打ちをかける出来事により、高校入学後間もなく登校意欲を失うが、これは単にCIが言葉がうまく話せないことだけが原因となって起こったことではない。不登校の背景には、CIが入学当初から、言葉ではなく身体のレベルで、学校が持つ

雰囲気への違和感や息苦しさを感じていたことが考えられる。すなわち、本CIは、その学校があるいは現在のどの学校にもありがちな、明るく元気な教室、そしてそのような学校の文化にそもそも馴染めなかったのではないかとということである。

学校という集団の中で、生徒たちは自分が仲間はずれにされないために、とにかく明るく元気でノリのいい自分を装い、時に軽いジョークなどを添えながらかかわろうとしがちである。しかし、田んぼと海を南北に見渡せる地域の風土、そして比較的言葉の少ない家族の中で育ったCIにとって、特に義務教育から解放された生徒たちが集う活気に満ちた高校生活は、かなりのカルチャーショックであったに違いない。もともと感受性が強く、神経質な面があったにせよ、中学校までは地元ののんびりとした風土の中で、まだしも凌ぎやすかったのではなかろうか。考えてみれば、一昔前の農家などには、このCIのように寡黙な青年は結構たくさんいたのかもしれない。この高校に限らず、現在は、CIのように流行にはあまり関心を示さず、対人関係には敏感な子どもたちが、とにかく不適応を招いてしまうような時代なのかもしれない。その意味で、CIが学校へは戻らず、明るくノリのよい会話がなくても勤まる塗装の仕事をはじめたという選択は、当時のCIの人柄や家の文化を考えると、最も無理のない選択であったように思われる。このような観点からすれば、CIの緘黙という症状は、やがて、彼が生まれ育った地域や家族の風土と無理なく折り合っていき、「大人の無口」という性格としていつの間にか治癒していく姿を十分感じ取ることができるのである。

## 5. まとめ

最後に、思春期・青年期のクライアントとかがかわる際に、セラピストの側に必要な心構えについて触れておきたい。思春期・青年期の臨床では、セラピストの力の入れようとは裏腹に、クライアントの変化のなさに直面させられ、とにかく時間とエネルギーが浪費されているように感じやすいものである。しかし、そのような焦りは、周囲にいる親や学校の教師たち、そして実は誰よりもクライアント本人が体験している感情であり、時にそれはクライアント自身を追い詰め、責めさいなむものになりがちである。

このような状況の中で、援助者にできることは、クライアントの現在のありのままの状態が十分に保証される人的な環境づくり、これ以外にはない。治療をはじめ教育や援助の発想は、本人にまだ具わっていない力に着目し、それを人為をもって引き出そうとしがちである。そのために、本人が今現に持っている手持ちの力のことに目が届いていないことがしばしばある。ありのままの状況が保証されるということは、決してセラピストとして「なす術がない」ということではなく、今あるコミュニケーションの手立てを十分に活用しつつかかわっていくということを意味する。まずは、目の前のクライアントをよく見ること、ここからすべてがはじまる。

具体的には、クライアントの話ができないという現状をまずは十分に保証し、待てること、そして、目に見える効果という観点を差し控え、寄り道や時間の無駄とも思われるようなかかわりを続けていけること。それは、いつになっても話をしてくれないクライアントとの関係それ自体を楽しめることだったのであるが、その大切さは、かかわっている現時点で感じ取ることがとても難しい。したがって、援助者は、一見意味がないように思えるかかわりの意味がいくらかでもわかっておくことが必要であろう。すなわち、クライエ

ントとのかかわりの中でセラピストの内部に生じてくる様々な感情は、セラピスト個人がただひとり体験させられている感情なのではなく、クライアントにかかわろうとする周囲の人の多くが体験している感情であること、したがって、それらの感情をセラピスト個人が「抱えていく」工夫こそが、実は、クライアントを、そしてクライアントの周囲の人たちを支えることにつながっていくのだということ。目に見えないこの作業こそが、セラピーの根幹に据えられるべき課題だということである。

そして、最後に、本事例のクライアントは、もともと言葉の少ない家族、言葉の少ない風土の中で育ってきたことを思い起こしたい。不登校の子どもたちも、ひとりひとりみんな違う。今、目の前にしているその子にとって何が必要か。このことを、その子の10年後、20年後の姿をありありと思い描きながら考え続けていくこと。そのような地道な工夫と努力こそが、クライアント本人が何より必要としている援助の形なのではないだろうか。

## 文献

- 相場壽明（1991） 選択性緘黙の理解と治療。 特殊教育学研究, 29(1), 53-59.
- エリクソン,E.H. (1959) 自我同一性. 誠信書房.
- 島瀬直子(1978) 心因性緘黙症児のための心理治療仮説. 児童精神医学とその近接領域. 第19巻第4号.
- 神田橋條治(1990) 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社.
- 加藤隆勝・高木秀明編(1997) 青年心理学概論. 誠信書房.
- 河井芳文・河井英子(1994) 場面緘黙児の心理と指導. 田研出版株式会社.
- 大石英史(1997) 「抱え」によるアプローチが関係への依存を誘発した一事例. 心理臨床学研究, 14(4), 436-447.
- 内山喜久雄(1959) 小児緘黙症に関する研究. 北関東医学 9, 786-799.
- 上田暁子(1997) 場面緘黙とその心理機制. 山口県立大学文学部卒業論文.
- ウィニコット,D.W. (1971) 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.